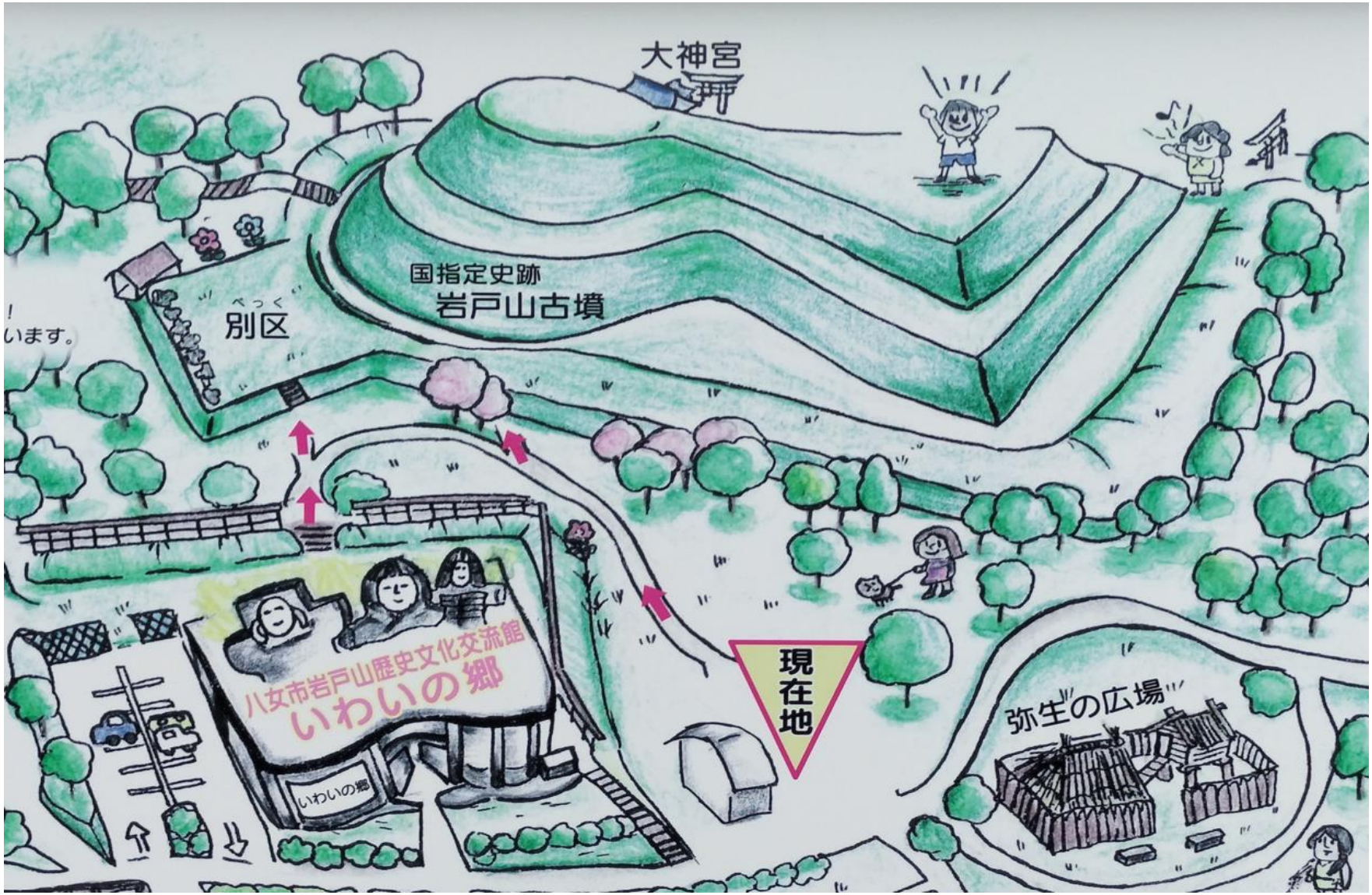
岩戸山古墳（八女市）

6世紀前半に築造された北部九州最大の前方後円墳で、筑紫君磐井の墓とされる/後円部の後ろに広い別区（祭儀の場所であったらしい）がある



木々に覆われていて墳丘が見えにくいが、前方部（右手前）から後円部（左奥）を見たところ

左手の後円部方向を見たところ

video

右手の前方部後ろを見たところ

国指定史跡　八女古墳群

岩戸山古墳

指定年月日　昭和30年12月23日（名称変更　昭和53年３月24日）
所　在　地　八女市大字吉田字甚三谷

八女丘陵は東西10数kmにおよぶ丘陵である。この丘陵上には11基の前方後円墳を含む約 300基の古墳がつくられ、八女古墳群と呼ばれている。八女古墳群のほぼ中心に位置する岩戸山古墳は九州最大級の前方後円墳で、東西方向に墳丘長約 135ｍ、東側の後円部径約60ｍ、高さ約18ｍ、西側の前方部幅約92ｍ、高さ約17ｍをはかり、周濠、周堤を含めると全長約 170ｍになる。墳丘は二段築造で、内部主体は未発掘のため不明である。

古墳の東北隅には周堤に続く一辺約43ｍの方形の区画（別区）が存在している。

岩戸山古墳は日本書紀継体天皇21年(527）の記事に現われた筑紫君磐井の墳墓であり、全国的に見ても古墳の造営者と年代のわかる貴重な古墳である。

古墳の墳丘・周堤・別区からは阿蘇凝灰岩でつくられた多量の石製品が埴輪とともに出土している。種類も人物（武装石人、裸体石人等)、動物(馬・鶏・水鳥・猪？(犬?)等)、器材(靫・盾・刀・坩・蓋・翳等)があり、円筒埴輪などとともに古墳に立てられていた。石製品は埴製（土）を石製に代え、さらに実物大を基本とした所に特徴がある。

筑紫君磐井（つくしのきみいわい）

約1500年前の古墳時代後期に当地を含めた現在の福岡県南部地域を拠点として活躍した大豪族である。

奈良時代に編纂された古事記や日本書紀には磐井に関する記述が残っており、日本書紀では「磐井は西の戎の奸猾なり。川の阻しきことを負みて庭（つかへまつ）らず。」とされ、悪賢く朝廷に仕えない人物と評価されている。

また、磐井は西暦527年に火国（ひのくに）・豊国（とよのくに）（現肥前・肥後・豊前・豊後）と共に叛乱を起こし、翌528年には筑紫の御井郡（みゐのこほり）（現久留米市の三井周辺）において決戦が行われ、磐井は斬られたとも記されている。

しかし、筑後国風土記（逸文）には「豐前（とよくにのみちのくち）の國上膳（かみつみけ）の縣（あがた）に遁（の）れて、南の山の峻（さか）しき嶺（ね）の曲（くま）に終（おう）せき。」とあり、現在の豊前市付近に敗走したと伝えている。

この記述は、磐井が地域の盟主であるが故のかも知れない。に生かしておきたいとの郷土民の強い想いであった

2015年11月

八女市教育委員会

別区に並んでいたとされる石製表飾品（石人・石馬）/レプリカ/本物は八女市岩戸山歴史文化交流館で見ることが出来る/腕や頭が壊されている！

video

岩戸山古墳「別区（べっく）」

ここは「別区」といって約四三メートルの正方形になった台地です。

『磐井の乱』（五二七年）後、約二〇〇年を経た奈良時代につくられた、筑後国風土記にこの別区のことが次のように記されています。

「東北の角に当りて一つの別区あり、号けて衙頭と曰ふ。其の中に一の石人あり、縦容に地に立てり、号けて解部と曰ふ。前に一人ありて、裸形にして地に伏せり。号けて偸人と曰ふ。（偸みき。むとす。）側に石猪四頭有り。贓物と号く。（贓物とは盗物なり。）（生けりしとき、猪を仍りて罪を決められ）彼の処に亦石馬三疋、石殿三間、石蔵二間有り。」

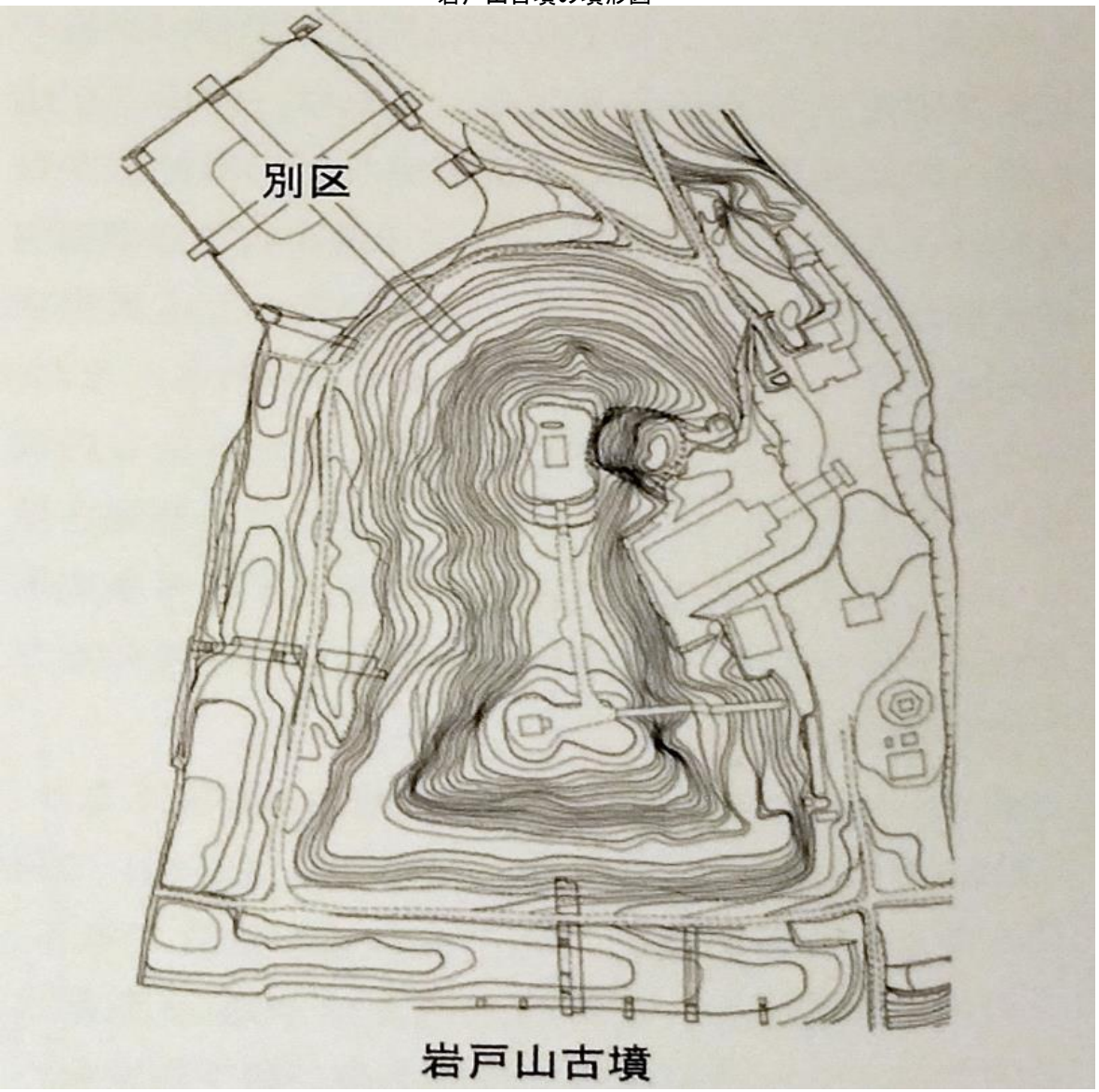
すなわち盗人が猪四頭を盗んでその罪を裁かれる状況と解釈されるような石製品配置がなされたところがここの「別区」であり、また「別区」は祭儀の場所であったとも考えられています。（衙頭とは政所なり。）

全国の古墳の中でこのような「別区」を有し明確に現代まで残っているのは、ここ岩戸山古墳だけです。

平成元年十月

八女市教育委員会

岩戸山古墳の墳形図



令和4年度高崎市観音塚考古資料館第34回企画展図録より

後円部墳頂にはかって吉田大神宮社殿があり、前方部への登り口である階段前にその鳥居が立っている video

「大神宮」と記された神額

video

これは括れ部下の辺りに建つ、現在の大神宮社殿

その付近には木造阿弥陀如来坐像が納められた祇園社がある

video

木造阿弥陀如来坐像（もくぞうあみだにょらいざぞう）

（市指定文化財　有形文化財）

指定年月日　昭和五十八年三月二十八日

所在地　八女市吉田

高さ（像高）七九・八センチメートル

幅（肩張）三八・五センチメートル

厚さ（胸厚）二六・五センチメートル

鎌倉時代に地方仏師により造られたもので、樟（くす）による一木造りの鎌倉仏特有の堂々とした量感の阿弥陀如来坐像である。

建長四年（一二五二）に創建された元吉田区氏神の老松天満宮の阿弥陀堂本尊で、同天満宮が大神宮に合祀（ごうし）された大正十四年（一九二五）にこの祇園（ぎおん）社内に移された。

平成三十年九月　八女市教育委員会

同じく、こちらは石造猿田彦塔

八女市指定文化財（有形民俗文化財）

指定年月日　昭和五十九年十月二十五日
所在地　八女市大字吉田字甚三谷一五五四―一
名称　石造猿田彦塔（せきぞうさるたひことう）一基
高さ　八十八センチメートル

猿田彦塔は方柱状につくられた凝灰岩製の塔である。

塔前面を火燈窓型（かとうまど）に彫りくぼめ下段は角を入隅（いりつみ）にとり正面に「猿（猿）田彦大明神」と刻記されている。塔に刻まれた元禄（げんろく）十三年（一七〇〇）の銘は福岡県下の猿田彦塔としては最古例に属し、庚（こう）神（しん）信仰を知る貴重な資料である。

大神宮

昭和六十一年十二月　八女市教育委員会

さて、前方部墳頂に登ると境内社の松尾宮がある

これは前方部から後円部方向を見たところ

video

括れ部辺りで、後円部方向を見たところ

video

ここが後円部/石段はかってこの上に大神宮社殿があったことによる

後円部墳頂

「大神宮舊跡」と刻まれた標柱が立っていた

後円部の墳頂で前方部方向を見たところ

video

前方部の階段を下りて来ると、沢山の石造物が並んだ覆屋があった

video

さて、墳丘の裾を廻って見ると、後円部と記された表示板があった/正面が後円部 video

こちらには前方部と記された表示板があった/正面が前方部

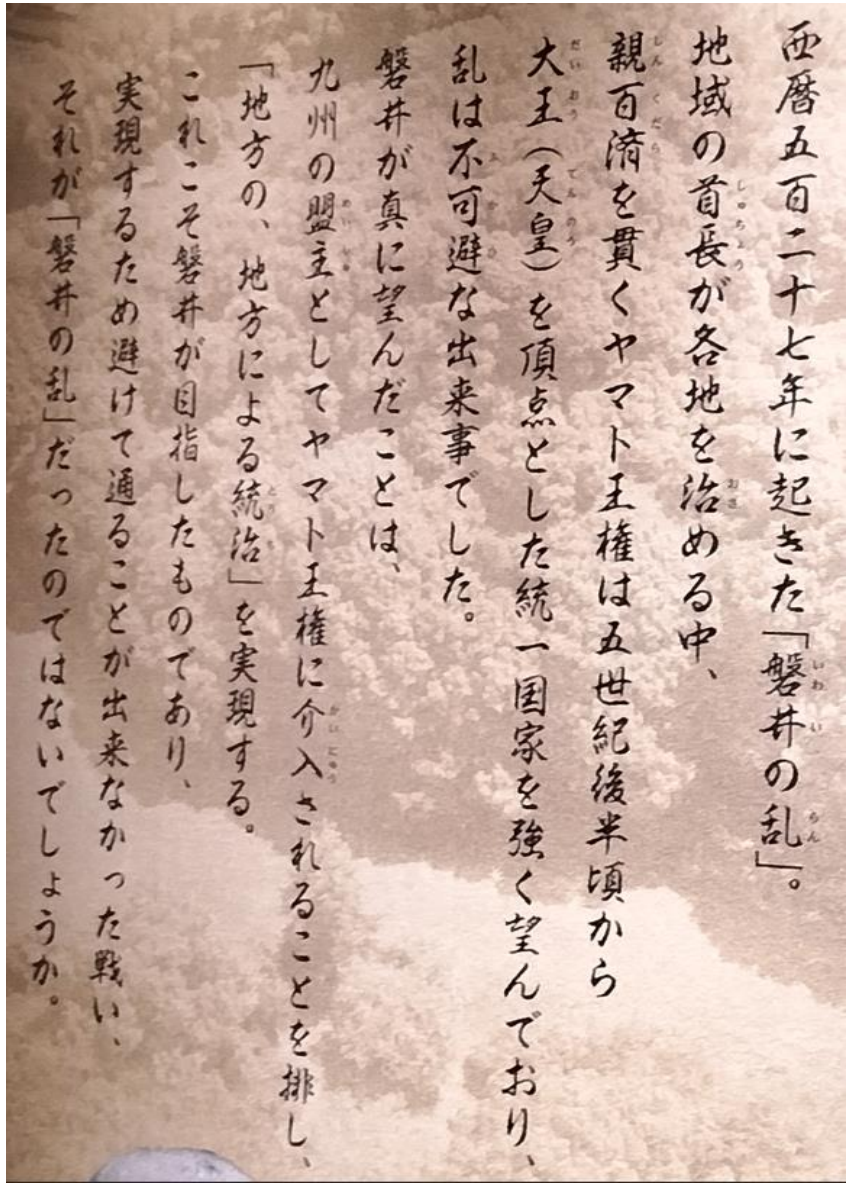
これは括れ部の辺りで墳丘を見たところ/写真では分かりにくいが、ビデオで見ると何とか・・・ video

さて、ここはすぐ近くに併設されている「八女市岩戸山歴史文化交流館 いわいの郷」

エントランス前では筑紫君磐井がお出迎え！

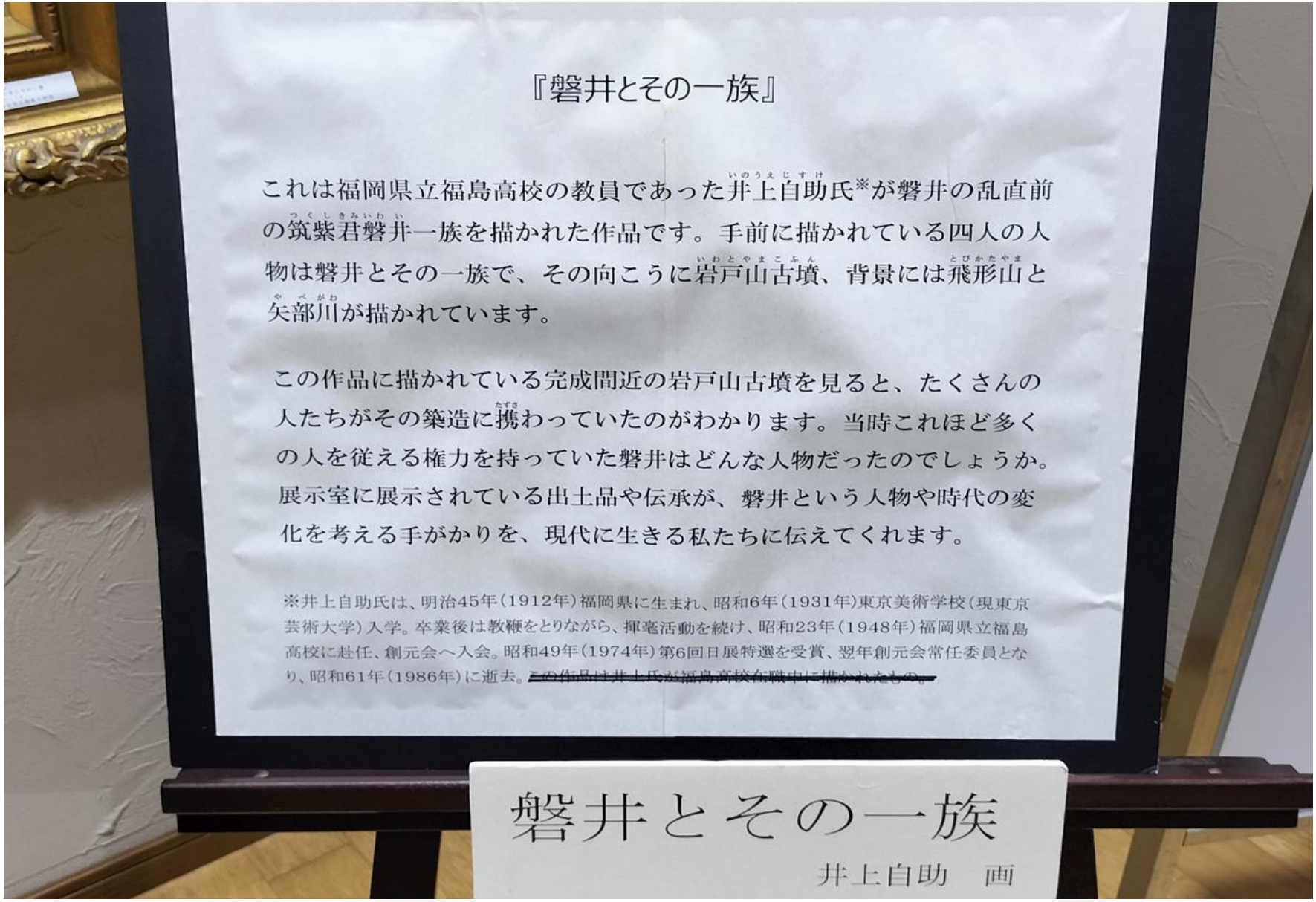
エントランスを入ると、『郷土の英雄「筑紫君 磐井」』というキャプションが！

盟主として、王権に介入されぬ「地方の、地方による統括」？



これは博多人形師である野田祐輔氏作の筑紫君磐井

こちらは井上自助氏が描かれた「磐井とその一族」


『磐井とその一族』
これは福岡県立福島高校の教員であった井上自助氏※が磐井の乱直前の筑紫君磐井一族を描かれた作品です。手前に描かれている四人の人物は磐井とその一族で、その向こうに岩戸山古墳、背景には飛形山と矢部川が描かれています。
この作品に描かれている完成間近の岩戸山古墳を見ると、たくさんの人たちがその築造に携わっていたのがわかります。当時これほど多くの人を従える権力を持っていた磐井はどんな人物だったのでしょうか。展示室に展示されている出土品や伝承が、磐井という人物や時代の変化を考える手がかりを、現代に生きる私たちに伝えてくれます。
※井上自助氏は、明治45年（1912年）福岡県に生まれ、昭和6年（1931年）東京美術学校（現東京芸術大学）入学。卒業後は教鞭をとりながら、揮毫活動を続け、昭和23年（1948年）福岡県立福島高校に赴任、創元会へ入会。昭和49年（1974年）第6回日展特選を受賞、翌年創元会常任委員となり、昭和61年（1986年）に逝去。
磐井とその一族
井上自助　画

館内の展示エリアに入ると、こんなキャプションが・・・

筑紫君磐井にとって継体天皇が最大のライバルというストーリーで構成されているが・・・

筑紫君磐井の乱の真相について迫ってみよう！

岩戸山歴史文化交流館（八女市）のキャプションでは、筑紫君磐井にとって時の大王である継体天皇を「最大のライバル！」としている。

しかし、『郷土の英雄「筑紫君 磐井」』としてみる郷土愛も結構なこととは思われるが、当時の政治状況下でヤマト王権に組み込まれていたと思われる地方の一豪族（大豪族ではあったようだ）が、大王とライバル関係にあると考えることには少しムリがあるのでは・・・
（当時、筑紫君磐井を上回るような大豪族は上毛野や尾張などにも存在している）

図 20　6 世紀前半の主要大型前方後円墳（130 m 以上）

「国立歴史民俗博物館研究報告 第 211 集 2018 年 3 月　東国における古墳時代地域経営の諸段階　上毛野地域を中心として　若狭 徹」　より転記
※　埼玉二子山古墳を除く諸古墳は、継体天皇の陵墓・今城塚古墳と相似形とされる（墳丘企画が同一で、その規模の大小が連帯関係を表象している）

『**日本書紀**』には・・・ヤマト王権の近江毛野が6万人の兵を率いて、新羅に奪われた地を回復するため、朝鮮半島南部へ向かって出発したが、この計画を知った新羅は、筑紫君磐井へ贈賄し、ヤマト王権軍の妨害を要請した。磐井は挙兵し、火の国（肥前国・肥後国）と豊の国（豊前国・豊後国）を制圧するとともに、倭国と朝鮮半島とを結ぶ海路を封鎖して朝鮮半島諸国からの朝貢船を誘い込み、近江毛野軍の進軍をはばんで交戦した。・・・というようなことが記されているようだ。

一方、『**古事記**』には・・・磐井が大王の命に従わず無礼が多かったので殺した・・・とだけしか書かれていないらしい。

また、朝鮮半島側の資料には、磐井の乱の記事は全く存在せず、新羅が磐井に賄賂を送ったとする証拠は見当たらないようだ。

結果として、ヤマト王権軍と磐井軍の激しい戦闘の結果、磐井軍は敗北し、磐井は物部麁鹿火（ヤマト王権軍）に斬られたとされる。

『筑後國風土記』（逸文）

筑後の國の風土記に曰はく、上妻の縣。

縣の南二里に筑紫君磐井の墓墳あり。

高さ七丈、周り六十丈なり。

墓田は、南と北と各六十丈、東と西と各卅丈なり。

石人と石盾と各六十枚、交陣なり行を成して四面に周匝れり。

東北の角に當りて一つの別區あり。

號けて衙頭と曰ふ。衙頭は政所なり

其の中に一の石人あり、縱容に地に立てり。

號けて解部と曰ふ。

前に一人あり、縛形にして地に伏せり。

號けて偸人と曰ふ。生けりしとき、豬を偸みき。のりて罪を決められむとす。

側に石猪四頭あり。

贓物と號く。贓物は盜みし物なり。

彼の處に亦石馬三疋・石殿三間・石藏二間あり。

古老の傳へて云へらく、雄大迹の天皇のみ世に當りて、

筑紫君磐井、豪強く暴虐くして、皇風に偃はず。

生平けりしとき、預め此の墓を造りき。

俄にして官軍動ぎて襲たむとする間に、

磐井の勝つましじきを知りて、獨自、豐前の國上膳の縣に遁れて、

南の山の峻しき嶺の間に終せき。

ここに官軍、進ひ尋きて蹤を失ひき。

士、怪しびて石人の手を撃ち折り、石馬の頭を打ち墮しき。

古老の傳へて云へらく、上妻の縣に多く篤き疾あるは、

蓋しくは茲に由るか。

一方、『**筑後国風土記**』に於ける磐井の乱の記述では、その開戦は筑紫君磐井にとっては突然のことであったようで、「君」が示すようにヤマト王権に組み込まれて連綿と連帯してきた（岩戸山古墳は今城塚古墳と相似形とされる）のに「何故？」という思いだったのかもしれない。（日本書紀では惨殺されたことになっているが、筑後国風土記では石製表飾品の文化を共有していた大分県のエリアに逃げ延びていることになっている）

筑後国風土記は元明天皇によって全国に作成が命じられた風土記の一つで、在地の官僚が威信を掛けて現地を調査し土地の古老にヒアリングするなどしてまとめられたものであることや、官僚にとっては脚色などの記事を歪める必然性が全くないことから、ヤマト王権に都合よく脚色されやすい記紀よりも真実性は高いと考えられる。

※　古墳の相似形とは、

古墳とは第一義的には墓であるが、大王墓や首長墓には権力の象徴を示すとともに地域間のネットワーク（連帯・連合）のツールとしての機能が付加されており、その意味合いから被葬者が生前から築造を開始する寿陵であり、墳丘企画を共有することがネットワーク（連帯・連合）の証となっていたと考えられる。つまり、双方の古墳の墳形が相似形ということは、地域間のネットワーク（連帯・連合）言い換えれば親和的な関係が成立していたことに他ならない。

継体天皇の今城塚古墳と相似形とされる主な古墳
・尾張連草香の断夫山古墳
・上毛野君小熊の七興山古墳
・筑紫君磐井の岩戸山古墳

いずれも6世紀前半～中頃の築造

ところで、銀象嵌銘大刀が出土したことで知られる熊本県玉名郡和水町の江田船山古墳（5世紀後半築造の前方後円墳）の被葬者は3名であると考えられており、一人目はこの古墳の築造者である5世紀後半の被葬者、二人目は5世紀末葉ないし6世紀初頭の被葬者、三人目は6世紀前半の被葬者と云う。
銀象嵌銘大刀の銘文にはワカタケル大王（雄略天皇）の時代にムリテが典曹という文書を司る役所に仕えていたことなどが刻まれており、この典曹人のムリテが二番目の被葬者と云う。
墳丘の周りには、短甲を着けた武人の石人が配置されており、石人山古墳に始まり、6世紀前半の岩戸山古墳で最盛期を迎え、以後消滅する、墳丘の周りに石人・石馬を配置するというこの地方独特の様相を示している。
岩戸山古墳は筑紫君磐井の墓であると目されており、江田船山古墳も筑紫君一族の配下に連なった地域の中首長の墓と想像できると云う。
筑紫君一族の配下が時のヤマト王権に出仕していた（王権に組み込まれていた）ということを考えると、筑紫君磐井の乱がそれから間もない継体朝にヤマト王権と対峙するような大きな争乱であったとは思えないのだが・・・（ちなみに筑紫君磐井もヤマト王権に出仕していた時期があったとも思える記述が日本書紀に残っている）

※　日本書紀では近江毛野軍の進軍をはばんで交戦した際に、磐井は近江毛野に「お前とは同じ釜の飯を食った仲だ。お前などの指示には従わない。」と言ったとされている。
これは磐井も近江毛野と同様に、以前はヤマト王権に身を寄せる立場であったことを物語っているようにも読める。

では継体天皇とはどのような人物であったのだろうか？（以下はあくまで想像ですが・・・）

継体天皇は元来、越前（日本海）・近江（琵琶湖）・三島（淀川水系）に力を持っていた豪族に支えられ、交易のための港湾ルートの開発・整備に尽力していた人物とみることが出来そうである。継体天皇はそもそも越前・近江・三島のエリアの水系開発のデベロッパーとしての生業に従事していた人物であり、応神天皇の系譜であるという伝承も薄れていたこともあり、王位に就くことにそれ程の執着はなかったのではなかろうか。むしろ、越前時代には交易のため日本海ルートで朝鮮半島に渡った経験があったのかもしれない。

そのような経緯からも、継体天皇擁立には淀川水系の三島などの勢力に加え、目子媛の尾張や関東の勢力、そして筑紫君も重要な役割を果たしたのかもしれない。

請われて継体天皇として即位するが、一部畿内の豪族たちの反発もあり、自分の拠点近くに宮を置いて淀川水系開発も睨みながら政務を執ることになった結果、20年という月日が経ってしまったと思われる。

しかし、その間、淀川水系を開発して日本海ルート・琵琶湖・瀬戸内ルートの交易基盤を確立することに注力していたのではなかろうか。

それはスカウトされた継体天皇の主なミッションが、雄略天皇以後の大王家の混乱に伴う王権のゆるみを是正すべく、中央集権化を強め、当時弱体化しつつあった朝鮮半島南部の権益を確保することであったからと思われる。

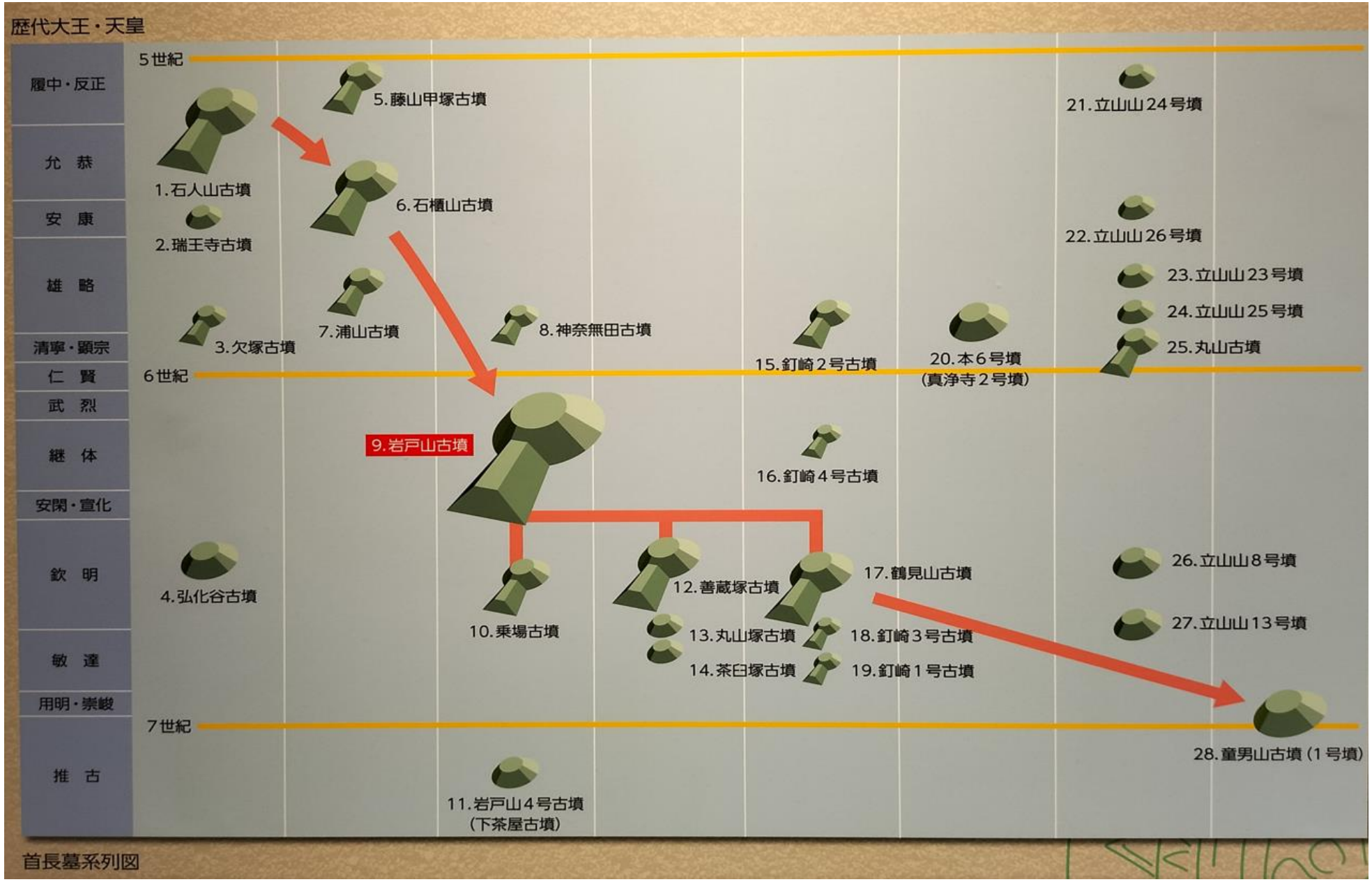
さて、真相は・・・

継体天皇が自分の従来の拠点近くに宮を置き、政務を執りながら、淀川水系に大型の準構造船が入港できるように開発したのは、磐井の横暴を止めるための戦いに備えるためという考え方もあるようだが、むしろ、継体天皇のミッションの一つであった倭の朝鮮半島の権益を守り、交易拡大のためのインフラと交易ルートの整備をすることが主眼であり、その構想に対して、独自のルートで朝鮮半島に交易を拡大し、北九州付近のヤマト王権の拠点整備に非協力的な態度であった筑紫君磐井は咎める必要があったのではないだろうか。

結局、討伐された一番の原因は当時ヤマト王権が中央集権化を強化する一環として、国造制の普及（この頃まではまだ国造制は成立していなかったとされる）と合わせて全国の要衝（水路と道路の結節点）に屯倉を置く政策が進められていた中で、それを良しとしなかった筑紫君磐井は反逆者に仕立て上げられたのではなかろうか。（ちなみに、その息子・葛子はその結末に屯倉を献上し、罪を問われずにその後も末裔は繁栄している/考えようによっては筑紫君磐井は掌握するエリアを筑紫に限定されるとともに領内に屯倉が設置されることを良しとしなかったが、息子の葛子はヤマト王権の申し入れに反対はしていなかったのかもしれない）

そして、物部麁鹿火軍は筑紫君磐井を取り逃がした腹いせに、岩戸山古墳の石人・石馬をことごとく破壊したという尾ひれが付く。（岩戸山歴史文化交流館に展示されている石人には腕が無く、石馬は頭部が無い）

筑紫の君一族の系譜/磐井の後も脈々と生き残っている/八女市岩戸山歴史文化交流館のキャプションより



腕の無い石人

video

頭部の無い石馬

同上

丁度同じ頃に、「武蔵国造の乱」が起こったことになっており、その結果武蔵国にも四ヶ所の屯倉が設置されている/これも争いありきではなく、屯倉設置を推進した言い訳（正当化）として、国造職を巡る同族間の争いがクローズアップされたに過ぎないようだ/ 当時、日本全国に屯倉が設置されているのだが、何のトラブルもなく設置されている所がほとんどのようだ/つまり、6世紀前半はヤマト王権が国内の中央集権化を推し進める時代であり、その政策として屯倉設置があり、それに付随して屯倉を管理する組織として国造制・部民制といった統治体制が導入されていくことになったことを日本書紀は伝えていると云うことのように思えるのだが・・・